

思春期小説 *The Man Without a Face* における「男らしさ」の探求

吉田純子

イザベル・ホランド (Isabelle Holland, 1920-) は、1967年の処女作 *Cecily* 以来、大人向けの作品を発表する一方で、ヤングアダルト小説を書きつづける作家である。なかでも1972年発表の『顔のない男』 (*The Man Without a Face*) は、少年の同性愛の性体験を描くという点で注目を浴び、1972年にヤングアダルトの「ベスト・ブック」賞、1973年には「ホーン・ブック」銀賞を受賞している。後に、*Authors and Artists For Young People* が「この本が広く知られているのは、主としてその物議をかもし題材のせいである」(84) と紹介しているが、この「物議をかもし」作品は、その後も忘れ去られることなく1993年に映画化され¹、再び注目を浴びることとなった。日本では映画化を機に邦訳も出版された。本稿では、この作品で「男らしさ (masculinity)」がどのように描かれているかを検証してみたい。

『顔のない男』の冒頭の文 “It was the summer I was fourteen that I came to know The Man Without a Face.” (7) は、この物語を端的に要約している。すなわち、父のない14歳の少年チャールズ (Charles Nostad) が寄宿学校^{プレップスクール}の受験勉強のために、ジャスティン (Justin McLeod) に個人教授を頼みに行ったのがきっかけで、無意識に求めていた「父親」を見出すことになる。マクラウドは、顔半分に火傷を負う「顔のない男」と呼ばれ、世間に背をむけて暮らす謎めいた人物である。

McLeod's house is on top of a cliff, several miles north of the harbor, and you have to go around the long way to get to his gate, the only opening in a stone wall built by some people-hating New Englander of the past. (27) (下線は筆者による)

周囲に石壁を築き断崖に建つ家、長いまわり道のすえに至り着くジャスティンの家とは、世間に背をむけて自閉する「顔のない男」の人生を暗喩する。そして館の主ばかりか犬や馬も、主人の分身として人間嫌いの役どころを演ずる。犬のミッキーが巨体の獰猛な犬として描かれる一方、馬のリチャードはよそ者を嫌う神経過敏な馬として描かれている。道ばたでジャスティンに拾われたミッキーは車に轢かれ脚を骨折していたし (134)、ジャスティンに飼われる前のリチャードは虐待を受けていたのである。

“[Richard]’s been abused. All people spook him, as you put it.” . . .

“ . . . It took me weeks to get near him without his trying to stampede or shy, and more weeks to mount him. (63) (下線は筆者による)

人を寄せつけず乗せることを拒むリチャードの人間不信ぶりは、ジャスティンの生き方と重なる。いわば、心身に傷を負った犬と馬と人間がひっそりと身を寄せ合って生きている状況に、少年が出くわすのである。

では、チャールズは何を求めて「顔のない男」に接近していったのか。作品では、女の領域への嫌悪・拒絶感と、無意識的な「父親探し」という二つの動機が与えられている。ジャスティンに家出の理由を聞かれて、チャールズは、“Because I’m sick of living at home with three women, my mother and two sisters, . . .” (34) と答える。特に異父姉グローリアとは険悪な仲で、彼女は“chauvinism of the stupid male” とフェミニスト気取りでチャールズを攻撃する(19)。さらに、母親とグローリアが「双生児」のような関係であり、チャールズの敵であるという。“All of a sudden [Mother] and Gloria were a team agian. They were on one side and Dad and I were on the other.” (41)

だが、姉との対立と母親への嫌悪は、各々別の動機に基づく。ジャスティンはいみじくも、チャールズが姉に被害妄想を抱いていると言う。

“ . . . You seem to have a persecution mania about her . . . You put an awful lot on other people—your mother won’t listen to you. Your sister hates you What are you afraid of? . . . Is it about your father?” (79-89)

チャールズの姉への憎悪は、彼女が父親の暗い秘密をにぎっているからに外ならない。彼は姉を憎み父親の真実の姿から眼をそむける。つまり、父親からの逃避である。

一方、チャールズが母親を敵視するのは、母親に表される「家庭性 (domesticity)」への嫌悪からである。カメオのように美しい母親(9)の趣味が結婚である(11)と、離婚・再婚を繰り返す母親が誇張ぎみに「家庭性」と結びつけられているが、チャールズにとって「家庭性 (domesticity)」とは、母親による自分の男性性の「飼い慣らし (domestication)」を意味する。それは、野良猫モクシー (Moxie) をめぐる母親・息子の関係に暗示されている。母親はチャールズに言う、“Charles, you know I don’t like that filthy wild cat in your room and on your bed at night. He smells up the whole house.” (24, 下線は筆者) 母親がモクシーを“wild cat”と表現し嫌悪するのは、その野性的側面においてである。チャールズはモクシーを次のように説明する。

On just about every count you can think of he's socially unacceptable. Moxie's a big yellow tom, with one and a half ears, patches where his fur has been yanked out in his many fights, and scars around his face that give him a positively evil expression. (20)

体中に喧嘩の傷痕を残す雄猫モクシーは、母親の「家庭性」には受け入れがたい存在である。母親は、モクシーの存在を公認し飼いつづけるためには、去勢手術しかないと考える。

Two years ago [Mother] offered to let me keep him officially in my room if I would agree to have him altered. But I knew that this was just part of Mother's wholesale plan for the taming and domesticating of the male species, and I refused. (21) (下線は筆者)

ここでモクシーがチャールズの男性性 (masculinity) を表すと考えれば、母親が「男という種を手なづけ飼いつづける」ために「去勢」しようとしているのではないかと、というチャールズの不安も頷ける。アメリカ児童文学の成長物語では、ペットはしばしば子どもの分身として使われる。たとえば、Marjorie K. Rawlings の『子鹿物語』(*The Yearling*, 1938) では、野性化する子鹿をめぐる母親と息子の葛藤が描かれるが、それは見方を変えれば、思春期にさしかかった息子と母親の葛藤でもあった。さらに、その背後に「強い父親」の不在があることも忘れてはならない。少年の父親は、肉体的にも精神的にも柔弱で、自分を「強い父親」として息子に示すことができない。このような女性性の過多と不在の「父親」という組み合わせは、同じく『顔のない男』でもみられ、思春期の少年の胸中を観察すれば、母親からの逃避願望と父親の探求が表裏一体となっていることがわかる。すなわち、「顔のない男」は、顔を損なわれたジャスティンであると同時に、チャールズが “I couldn't see his face . . . it was just a blur.” (99) と顔も忘れてしまった不在の父親でもあるのだ。ホランドもエッセイで次のように解説している。

「顔のない男」というタイトルには、実は二つの意味がある。一つは、ジャスティンの顔に傷があるところからそのニックネームを指す。他方、チャールズがほとんど顔も覚えていない実の父親も指している。(1973, 299-300)

父のない思春期の少年が母親のもとを旅立ち、傷を負った父親的人物との邂逅を通じて、ついには自己確立を成し遂げ、さらに父親的人物の傷を癒すというのは、神話的なモチーフである。ユング心理学では、『アーサー王伝説』のパーシヴァル (Percival / Percifal) と漁夫王

(Fisher King) の物語は、少年の「父親探し」の旅／男性性の探求の物語として解釈されている²。ちなみに Robert Johnson によれば、「[漁夫王]の太腿の傷は、彼が生殖能力や人間関係の能力に傷を負っていることを意味する」(7)。つまり「傷」は、機能不全状態にある男性性のメタファーである。しかも、漁夫王の王宮には王の傷の癒しに関して一つの言い伝えがあり、「純真な心の愚か者」がいつか王のもとにやってきて、「傷」を癒すというものである。ジョンソンは、人の心の純真さこそが、漁夫王の傷を癒すのだと解釈する(11)。ホランドがこのような心理学的・神話的なモチーフを『顔のない男』の執筆時にすでに構想に取り入れていたことは、次の説明から明らかである。

ジャスティンがチャールズの人生に足を踏み入れたとき、彼は三つのものをもたらした。それらは、神話的にも心理学的にも、常に父親の原型だった。すなわち、力強い男らしさ、権威、内に秘めた優しさ。彼はチャールズの心の隙間に入り込み、その結果、大きな変化をもたらしたのである。(1973, 299-300)

たとえば、ジャスティンが授業方法をめぐってチャールズと対立したとき、“We do it my way or not at all” (Holland 1972, 45) と断固と言い放つと、チャールズは、その権威主義的な態度に “the old fascist method” (60) と反発しながらも、次第にジャスティンに心を惹かれてゆく。ホランドは、「それこそジャスティンの体現するもの——僕は愛情の一部に必要なものだと、堅く信じて疑わない強い父親だった」(1973, 300) と言う。

では、作品の発表された1972年の社会的・文化的文脈において、「強い父親」を求めて「顔のない男」に向かう少年のベクトルとは何なのか。作品中の所々に時代背景が挿入されているが、その一つに学校での悪平等主義の教師の態度があげられる。“In the school I go to it's considered repressive and damaging to the personality for a teacher not to pick up any subject a kid introduces.” (Holland 1972, 60) とチャールズは語る。教師たちはその結果、生徒の不正行為さえ見逃してしまう。また、思春期の息子にゴミ捨ての仕事を下手に頼んだら、新品のカーペットの上におちまけられ、あげくに息子に謝罪させられた親の話(66-67)もチャールズの語りの中に挿入されている。このように子どもたちに断固とした態度をとれない教師や親の姿を戯画的に描いて、ホランドが読者に伝えようとしたものは、「父なき社会」の状況であった³。

こうして柔弱な父親たちの中で「強い父親」が浮き彫りにされる。たとえば、ジャスティンは、チャールズが友人の作文を盗作して提出してきたとき、一目で盗作と見破り次のように言う。

“If you ever give me anything phony again, the old rules as stated apply. Out. Remember, it's your choice. Do you want to learn or not? You came to me. Not I to you. Just who's doing whom a favor?”(50) (下線は筆者)

ジャスティンは、家庭でも学校でも甘やかされて育ったチャールズに、くりかえし自由選択と責任が表裏一体であると教える。“Just don't expect to be free from the consequences of what you do, while you're doing what you want.”(87) ジャスティンが権威を示し、なおかつ優しさ親密さをみせはじめると、チャールズは “I wish you were my father.”(119) と言って心を全開するのである。

作品発表の1972年当時、アメリカは泥沼化したヴェトナム戦争の末期にあり、第二次フェミニズム運動の洗礼をうけ、若者は「反体制文化 (counterculture)」から「ミーイズム (meism)」に移行しつつあった。Betty Friedan は、この時期に「いつも警戒態勢を取り」「他の男性と競争し、『得点』をあげることで男を定義づけられるという“男らしさの神話”(158) が崩壊しはじめたと言う。そして、それに代わって「感受性豊かな、やさしい、思いやりのある人間になることができ、(中略) 恐怖心を認めたり、泣くことさえできるようになる」(159)「新しい男性 (new man)」が誕生する。その誕生の喧伝は男性の側からも積極的になされ、心理学者 Herb Goldberg は、1976年に出版当時ベストセラーとなった『男が崩壊する』(*The Hazards of Being Male*)において、「男が生き残るためには、すべての男性が、自分の中にある強力な女性的面を意識の一部として組み込むことが、非常に大切である」(70) と「新しい男性 (new male)」を支持している。

この「新しい男性」が仕事の業績を上げるためにがむしゃらに働く「過当競争 (rat race)」「出世コース (fast track)」を走る人生から、「マイホーム主義のパパコース (daddy track)」へとコース変更をするのもこの時期である。Robert Griswold によれば、1970年代から1980年代にかけて、「一家の稼ぎ手」＝「男らしさ」とする伝統的な父親像が理想像から後退したという(4-5)。父親たちは、仕事のために使っていた時間とエネルギーを家族に向けるようになった。グリスウォルドは、彼らを第二期の「新しい父親 (new father)」と呼んで、1920年代から1930年代にかけて台頭した第一期の「新しい父親」と区別する。

第一期の「新しい父親」は、19世紀後半から20世紀にかけて従来の攻撃的で「男らしい」男性像と共存していた、優しく感受性豊かな白人中産階級の男性像、「男性的な家庭性 (masculine domesticity)」から発展的に誕生してきた父親像である (Rotundo, 262-63; Robert Griswold, 59)⁴。彼らは、専制的な家父長権を手放し、妻子に対して「親切で面倒見のよい民主的な人物」としてよき父親・よき夫の役割を演じていた。それは、父親であることが「一家

の稼ぎ手」であり、母親であることが子どもの養育者という性別役割の上に成立する父親像だった(6)。この父親像は、その後も衰退することなく、第二次大戦後のベビーブーム世代に理想の父親像として生きのびる。「民主的な」父親像は、いまだ記憶に生々しいファシズムに対抗するイメージとして人々に歓迎され (Robert Griswold, 100), 性別役割を前提とする国民的な「一心同体の家族 (family togetherness)」の潮流に呑み込まれていった。

……50年代, 60年代の専門家たちの主張では, 民主的・許容的で育成力のある感性をそなえた父親たちこそ, 当時の新しい危険から子どもたちを守り, 十分適応した人間に育てあげることができるという。すなわち, 子どもを権威主義に毒させず, 非行から守り, 精神病や同性愛にならぬようにできるというのである。(Robert Griswold, 186)

19世紀後半以来, 父親たちは「男らしさ／女らしさ」「強さ／繊細さ」という二項対立の概念の間を揺れ動きながら, 自らの男性性を探りつつけてきた。とりわけ「男らしい強さ (manly toughness)」は, 第二次世界大戦後のナチズム断罪, ヴェトナム反戦運動, 第二次フェミニズムなどにより次々と攻撃の矢面に立たされ, そのたびに否定され傷ついてきた。特に60年代の父親たちは, その性別役割原理ゆえに, フェミニストにより厳しく断罪された。その結果彼らは, 離婚という予期せぬ「罰」を食らうこととなった。作品中の離婚・再婚を繰り返すチャールズの母親は, 当時の「男らしさ」の体質改善にかかわるフェミニストの姿を戯画的に表している。一方, 成長期にある息子たちは, 親の離婚により父親たちと引き離されるために重要な役割モデルを失い, 「男性性」の切断 (mutilation) という痛手をこうむる。こうして離婚は, 息子の性の同一化にも打撃を与えたのである⁵。また, 離婚に直面しないまでも, 心理学者ゴールドバーグが「ほとんどの男は, 馬具をつけて暮らしている」(1) と表現するように, 男性たちが「馬具」で自分の感情を押し殺して制御し, 「男」を演じてきた結果, 「男の崩壊」に直面して心身症に追い込まれる事例が後を断たなかった。したがってジャスティンの顔の傷は, 社会・文化的な変革の過程で傷ついた「男らしさ」を暗喩するとも受けとれる。

その傷の癒しには, 心理治療的な時空間が必要であった。それは, 作品では「金色の繭 (golden cocoon)」と呼ばれ, 第三者の介入を遮断して (特に母親とグローリアには秘密で), 崖の上の孤立した館で, 「傷」を負った「父と息子」が相互に心の傷を癒してゆく特別な時間と空間である。出会いの初期の段階では, ジャスティンは教師として父親代理として施与者 (Giver) の立場にあった。ところがある時点からふたりの間には, 強力なカセクシスが流れ始め, チャールズはジャスティンにとって不可欠な存在となり, ときには立場が逆転してチャールズが Giver となり, エネルギーの相互交流が始まる。チャールズはこの時期を “I felt like I

was in a sort of golden cocoon and I didn't want to break out of it.”(121) と表現する。

「金色の繭」の中で「父と息子」が一体化して、新しい自己の誕生にむけて作業をすすめる一方、その作業には過去に負った各自の「傷」との対面も含まれていた。すでに述べたとおり、実の父親が英雄的な空軍パイロットであると頑なに信ずるチャールズは、グローリアを被害妄想的に憎み、現実の父親の姿から逃避する。そしてその逃避的な空想はジャスティンにも向けられ、彼を「戦争で負傷したヒーロー (the wounded war hero)」(90)だと空想する。ジャスティンは現実逃避をする少年に出会って初めて、自らの逃避的な生き方に気づくのである。

“I accused you of always running away. Well, that's what I did. Only instead of running I built a wall. Being a writer made it easy; easy to be up here earning a living, easy to be alone and keep clear of people.”(109)

ジャスティンは、互いの「傷」を直視するために、「戦争で負傷したヒーロー」という偶像を壊す。すなわち、飲酒運転による交通事故から同乗の生徒を死に追いやったこと、そしてそのときに、顔半分を負傷したことを告白する。この傷の背後に、さらに深い傷——同性愛者の性アイデンティティに負った傷——が癒されぬまま疼いている。

しかしながら、チャールズは、「金色の繭」の中で痛みをとまなう作業が進行していることには無知だった。彼にとってこの時期は、共に学び水泳や乗馬を楽しみ食事をする、いわば親密な「父と息子」の関係の回復期だったのである。チャールズは語る。“I knew then that I'd never been close to anyone in my life, not like that. And I wanted to get closer.”(120) この親密さには身体的接触がともなった。ホランドはエッセイで、これを “a love story—an unusual love, but nevertheless, a love story.”(1973, 300) と呼ぶ。つまり、『顔のない男』が「父と息子の愛の物語」だというのである。心理学者 Annette Fréjaville によれば、幼児期の息子が父親を同一視するとき、ふたりの間に相互の理想化が起こるといふ。それは “primary homosexuality”, 別名 “love story” であるという (qtd. in Corneau, 27)。ユング派心理学者 Guy Corneau は、「男性が物理的・精神的な父親の喪失をこうむっているとき、男性の体を物理的・身体的に求めることによって自己の再発見をしたとしても、なんら驚くべきことではない」(72) と言って、父のない少年の性の同一性の探求には、しばしば男同士の身体接触をとまなうことを認めている。また、フロイト派の心理学者 Peter Blos も、思春期の少年が前エディプス期のコンプレックスを解決するとき、「顕在的なもしくは安定した意識的な同性愛志向をとまわらない、疑似同性愛的な一時的な段階」(28) を経ることを認めている。幼児期から母親のもとで養育・監督されてきた少年にとって性の同一性とは、身体を除外した精神的同一化だ

けではなく、父親との身体的自己同一化をも意味する。

思春期の少年が同性愛の行動をとる場合、少年が性アイデンティティ確立のために、男性の体を求める必要性を感じ、それが性行動の動機となることがよくある。……この段階でのホモセクシュアリティは、一時的避難のようなものである。(Corneau, 67)

ところが「金色の繭」の段階では、チャールズには自分のホモセクシュアリティの自覚はない。ジャスティンに身体をすりよせる自分に気づいたとき、かろうじて “Do you think I’m queer?” と尋ねるばかりである。ジャスティンはその質問に, “No. Everybody wants and needs affection and you don’t get much. Also you’re a boy who badly needs a father.” (Holland 1972, 121) と答える。

さて、「金色の繭」における心理治療は、三つ巴の突発的な出来事により最終段階をむかえる。それは、チャールズが姉とボーイフレンドの性行為を目撃し、同時に猫のモクシーが事故死し、さらにアルコール依存症による父親の死が姉によって暴露されるという、衝撃的な体験だった。その直後、この事実の暴露によって、チャールズの記憶から締め出されてきた父親の思い出がよみがえる。それは、酔っ払った父が教会で醜態を晒すという恥ずべき記憶だった。チャールズは語る。

I remembered [Father’s] head, sagging between [the two men]. I remembered that it was cold, the bunches of candles making one blurred light, and I remembered running down the church aisle after the men, screaming at them. It was dark when I got outside and found Father sprawled on the pavement. (145) (下線は筆者)

この場面は、ジャスティンとチャールズが訪れた別の教会の場面とつながっている。そのとき、ジャスティンの顔が見えずチャールズはパニック状態に陥ったが、それは上の引用文にみる幼時期の精神的^{トラウマ}外傷に起因していたのである。こうして過去の^{フラッシュバック}回想によって、チャールズは心の傷との直面を余儀なくされる。二つの教会の場面での「顔のない男」は、実はジャスティン・マクラウドではなく、チャールズの父親だったと判明する。つまり、「父親探しの旅」の基点にたつ「顔のない男」の^{アイデンティティ}正体が明かされたのである。

注目すべきは、「金色の繭」を破る三つの出来事がチャールズの性アイデンティティの危機と密接にかかわっていることである。まず、チャールズの野性的側面／男性性を表すモクシーの無残な死は、彼の男性性の激変を物語る。第二は、チャールズが自分のベッド上での姉たちの性行為を目撃してしまったことである。これは、フロイトの言う「性的潜在期」の子ど

も時代を終えた少年が、大人の性に直面することを意味する。そして第三に、チャールズが実の父親の醜態を突如思い出すことによって、性の同一性の基盤が危機に見舞われたのである。この後、取り乱したチャールズがジャスティンのもとに駆け込む。

Justin reached me and put his arms around me and held me while I cried out of some ocean I didn't know was there. I couldn't stop. After a while he lifted me up and carried me to the bed and lay down beside me, holding me . . . The golden cocoon had broken open and was spilling in a shower of gold. (147) (下線は筆者)

「金色の繭」がついに破れ、そこからは少年の新しい自己が生まれるのだが、誕生に際してチャールズは同性愛の性の儀式^{イニシエーション}を通過することになる。自らのホモセクシュアリティに驚きとまどう少年に、ジャスティンは次のように説明する。

“There's nothing about it to worry you. You reacted to a lot of strain—and shock—in a normal fashion. At your age, anything could trigger it . . . It has something to do with me, sure. But nothing of any lasting significance. It could have been anyone—boy or girl.” (148) (下線は筆者)

チャールズの同性愛の性行動が一過性のものであり、異性愛だった可能性もあると語るジャスティンは、「恋人」としてよりも「息子」を気遣う「父親」としての姿を見せている。そして、この説明は、すでに述べた同性愛的父・息子関係に関する男性心理学の説明と合致する。

では、『顔のない男』が発表当時、どのような書評を得ていたのか、主だったものを取りあげてみよう。*The New York Times Book Review* では、

What happens when the passions of friendship synthesize into a sexual experience is the nub of Isabelle Holland's new novel . . . Their sublimated love leads to the expected—a sort of homosexual “Summer of '42” sexual experience. (8)

と、父親代理と若者との間の友情が同性愛に発展することに焦点をあて、“The Man Without a Face’ is a forward step in the ongoing battle to bring the teen-age children’s book to the same point of development as the teen-ager.” (8) と書評を結んでいる。また、*Library Journal* では、

The novel closely describes the long, hot summer it takes the boy to get [his

homosexual tutor's bed], but not the mechanics of what happened . . . Unsatisfying . . . too juvenile for adult reading and too nervously adult . . . for young readers. (2489)

と、同性愛行動の描写／説明不足のため、成人文学／児童文学のカテゴリー間での中途半端さを指摘している。さらに、アメリカ児童文学界の中心的な書評誌 *The Horn Book* では、少年が父親の人物に出会う事情を説明した後に、次のように書評している。

The author handles the homosexual experience with taste and discretion; the act of love between Justin and Charles is a necessary emotional catharsis for the boy within the context of his story, and is developed with perception and restraint. (August 1972, 376)

上にあげた書評以外で、当時のどの書評も異口同音に『顔のない男』での同性愛の題材に強い関心をよせている⁶。ホランド自身も、自作への世間の関心が同性愛ゆえであることを強く意識して、1973年のエッセイで、同性愛という児童文学におけるタブーについて次のように述べている。すなわち、タブーを破ること自体に興味があるのではなく、語り手として物語を面白くすることに興味がある。かつてのおとぎ話は、王子が「いばらの茂み」という障害物を乗り越えて「旅」をすることでラヴ・ストーリーが成立したのだが、大人世界の情報に晒されて暮らす現代っ子にラヴ・ストーリーを語ろうとすれば、心身障害、アルコール依存症、薬物中毒、同性愛などが「いばらの茂み」にとって代わることになる (1973, 302-303)。つまり、同性愛という題材は物語の戦略なのだ。しかも、70年代当時、それまで児童文学界でタブー視されていた「同性愛」という題材を許容する社会的な受け皿が形成されつつあった⁷。ホランド自身が認めているように、第二次フェミニズムのもたらした性革命 (sexual revolution) (300)、また、ティーンエイジャーたちを囲い込む「子ども時代」という壁の崩壊 (“the rumbling of the wall around childhood,” (1974, 117)) と彼ら独自の社会・文化の出現 (モラトリウムとしての思春期の社会的認知) をみて初めて、この作品の社会的受容が可能となったのである⁸。

ホランドは当時の性革命の追い風によって、「少年の父親探し」という神話的モチーフに同性愛的性アイデンティティをつけ加えることに成功した。異性愛的「一心同体の家族」の時代——40年代後半から60年代前半ならば、同性愛の「父親」像を描くことは、おそらく激しい「同性愛嫌悪」^{ホモフォビア}を招いたであろう。このような父親を提示できたことは、一世代前から見て画期的なことであった。Robert Griswold は「同性愛嫌悪」^{ホモフォビア}の根本に戦後期の文化的不安があると考え、以下のように説明する。

結婚し子をもうけることは、〈成熟〉〈責任〉を意味し、大人のしるしであった。独身をと
 おすことは未熟、無責任を意味し、またはもっと悪意にとられて、同性愛者を意味した。……
 「ぼくは敗北者だ」＝「ぼくは去勢されている」＝「ぼくは男ではない」＝「ぼくは女だ」
 ＝「ぼくはホモセクシュアルだ」(189-90)

このように男性アイデンティティ確立の失敗＝去勢不安＝同性愛嫌悪^{ホモフォビア}が結びつく環境作りは、
 Rotundoによれば、そもそも性別役割の前提となる「分離の領域 (separate sphere)」主義に
 由来するという。「男は外、女は内」を前提とするアメリカの近代家族 (Carl Degler, 23) は、
 子ども (息子も含めて) の養育を女性の手にゆだねてきた。その結果、19世紀後半には、「男
 性の中の女性 (the woman within)」といわれる性質 (柔弱さ、鈍さ、従属性、優しさ、感受
 性の豊か) を表す若者たちの出現をみたのである。そこで、男性の女性化 (feminization) に
 脅威を覚えた人々は、同性愛の男性を男性のカテゴリーから排除し、女性と同等にみなすこと
 で去勢不安をなだめようとした。Rotundoによれば、同性愛者のイメージは、男性のカテゴ
 リーの境界が侵されぬよう守るために作り出された「新兵器」であるという (279)。

心理学者 Stanley Hall は20世紀初頭に、思春期の少年・少女が性差に関して「男は男らし
 く、女は女らしく」すべきだと伝統的性差論を主張したが、とりわけ思春期の少年の女性的性
 質が成長を脅かすもの、発達失敗の証拠であると考えた (qtd. in Rotundo, 267-69)。極端な
 性差論を支持する社会で思春期をむかえた少年は、こうして「同性愛嫌悪」に陥るのである。
 したがって、思春期のチャールズが最終章において、“The word I had always disliked swam
 to the front of my mind: how much I loved [Justin].” (Holland 1972, 152) と、ジャスティン
 への愛を告白したことは注目すべきことである。

もしチャールズが20年早く生まれておれば、おそらく J. D. Salinger が『ライ麦畑でつか
 まえて』(*The Catcher in the Rye*, 1953) で描く Holden Caulfield になっていただろう。ホー
 ルデンは、^{プレップスクール}寄宿学校という男の世界で男として自己確立を試みるものの失敗して、崩壊寸前の
 精神状態で最後の網としてアントリーニ先生 (Mr. Antolini) に助けを求める。しかし先生が
 同性愛者であるとわかったとき、嫌悪感をあらわにして逃げ出す。だが、次のホールデンの言
 葉には、彼がアントリーニ先生に求めていたものが何か表れている。

“... I started thinking that even if he was a flit he certainly'd been very nice to me. I
 thought how he hadn't minded it when I'd called him up so late, and how he'd told me to
 come right over if I felt like it. And how he went all that trouble giving me that advice
about finding out the size of your mind and all...” (194, 下線は筆者)

ホールデンもチャールズと同様に、この父親的人物に優しさと権威を求めていたのである。彼はこの後、優しさ／親密さを求めて、“If a body meet a body coming through the rye” という歌に表される無垢の世界⁹——子どもの世界に退行し、ついには狂気の中に逃避する。一方、第二期の「新しい父親」像が誕生しつつある20年後にジャスティンに出会ったチャールズは、ホールデンとは違った人生を歩む。「金色の繭」の父子一体期を経て、寄宿学校^{フレップススクール}という「男の世界」にめでたく参入を果たしたチャールズは、父親代理という^{イニシエーター}教導者をもはや必要としない。ジャスティンは心臓病でこの世を去る。それを一部の書評で言われたように、同性愛者を罰するためと読むべきではない¹⁰。なぜなら、少年の心理治療的な物語という枠組をもつこの作品では、ジャスティンの死による作品舞台からの退場は、代理の父親と息子との心理療法の終了を意味するからである¹¹。

したがって、『顔のない男』に表された男性性の特徴を総括すれば、まず同性愛の男性が「父親」像に加えられたことである。それまで世間に受け入れられず「傷」を負っていた同性愛の「父親」的人物が許容された。チャールズがジャスティンへの愛を認めたことや、チャールズに宛てたジャスティンの愛の手紙にそれが暗示されている。

You gave me something I hadn't ever again expected to have: companionship, friendship, love—yourself and mine Try to forgive your father . . . forgiving yourself. (154)

換言すれば、ふたりは、男同士の親密な関係に対する不安／不快感を克服し、ゴールドバークの言う「馬具」の抑圧から男性の感情を解放するのである。

さらに、感情表現の怖れを克服した男性には、より積極的な役割が与えられる。それはジャスティンに体现される、傷ついた魂を癒す「養い育てる父親 (nurturing father)」の役割である。それは、女性に養育／世話の仕事を押しつける第一期の「新しい父親」とは異なり、自らが養育者として子どもにかかわる第二期の「新しい父親」の姿にほかならない。チャールズの濡れた服を脱がせ、冷えきった体を暖めてやり、昼食や夕食を用意して食べさせる。チャールズが勉強で疲れた様子をみせれば、水泳に乗馬に連れ出し、ショッキングな事件に見舞われ飛び込んでくれば、心の傷を癒してやる。『顔のない男』の最後の二つの文は、「養い育てる父親」としてのジャスティンを的確に表現している。チャールズは語る、“His other talent, for salvaging flawed and fallen creatures. Himself included.” *And me, I thought, as [Barry and I] drove through the gate.*”(157) このようなジャスティンこそ、チャールズの求めていた「父親」、「男らしさ」だったのである。

最後に、原作『顔のない男』と映画『顔のない天使』との相違点を比較すれば、最大の違いは、映画がジャスティンと少年の間に同性愛の行為がなかったと主張していることである。映画では、チャールズとジャスティンと同性愛的関係に「懸念」を抱く人々によって公聴会が開かれ、公の場で（つまり観衆にむかって）ジャスティン・マクラウドがその事実を否定する。さらに、映画のジャスティンは、チャールズとは死別せず、チャールズの士官学校の卒業式（＝大人の世界への儀式でもある）に「息子」の成長を承認するかのように姿を現す。そして、第三に、チャールズの卒業校が^{フレックススクール}寄宿学校から士官学校に変えられていたことにも注目すべきである。原作での「空軍パイロット」という少年の空想を、映画は少年の自己実現の題材に作り変え、「士官学校の卒業式」を成熟の認証式として使っている。つまり映画は、同性愛者ではない戦う男を成熟した男性像として提示して、同性愛の父親、養育力のある父親像を後退させてしまった。映画と原作とのこれらの相違点は、いったい何を意味するのだろうか。これに関する議論は、別の機会に譲りたい。

注

- 1) Mel Gibson の主演・監督による *The Man Without a Face* は、Herald 映画により1993年に制作された。邦題は『顔のない天使』である。
- 2) 以下参照。Emma Jung and Marie-Louise von Franz, *The Grail Legend*; Richard A. Ronpowers, *Boys Will Be Men*; Robert A. Johnson, *He: Understanding Masculine Psychology*; Guy Corneau, *Absent Fathers, Lost Sons*
- 3) ホランドは、別のところで、1960年代の反戦・学生運動家たちがじつは「強い父親」を求めていたという Margaret Mead の主張を支持している (1973, 300)。
- 4) それは、Mark Twain の *The Adventure of Huckleberry Finn* (1884) で Huck と友情を結ぶ父親的人物 Jim の中に、*The Prince and the Pauper* (1881) で Richard を優しい父親のように保護する Miles Hendon の中に投影されている (Jerry Griswold, 53-58)。また、Louisa M. Alcott の *Little Women*(1868), *Good Wives*(1869), *Little Men*(1871) に登場する Mr. March や Professor Baer の中にもみられる。
- 5) 女性運動の影響による男性像の変化については、Herb Goldberg の『男が崩壊する』第二章「大地の母は死んだ」(23-44) を、ベトナム戦争、女性運動による男性像の変化については、Betty Friedan の『セカンドステージ』(159-160) を参照。
- 6) 以下参照。Booklist 68 May 15 (1972): 816. Best Sellers 32 April 15 (1972): 46. Book World 6 August 6 (1972): 2. Choice 14 November (1977): 1178. Commonweal 97 November 17 (1972): 157. English Journal 62 December (1973): 1300. Kirkus Review 40

- January 15 (1972): 73. *Newsweek* 83 March 4 (1974): 83. *National Review* 24 July 7 (1972): 59. *Top of the News* 30 January (1973): 257.
- 7) 1970年代に入って、以前はタブー視されていた児童文学の題材が堰を切るように取り上げられるようになった。題材は、マイノリティの家族、離婚家庭の子ども、親子のノイローゼ、障害児、遺棄された子ども、反抗する子どもなど多岐にわたった。吉田純子著『アメリカ児童文学・家族探しの旅』5章～7章を参照。
- 8) “youth culture” については、Aaron H. Esman の *Adolescence and Culture* (42-52) を参照。
- 9) 以下参照。Edgar Branch, “Mark Twain and J.D. Salinger: A Study in Literary Continuity.” *Salinger: Critical and Personal Portrait*. 211.
- 10) *Library Journal* は、“... Justin goes to England and dies of a heart attack leaving his all to Chuck. It leaves any reader to ponder a truly screwy set of possible messages: death instantly awaits the pederast? ...”(2484) と述べている。また、Kate Fincke は、“... what Holland implies is that the transient adolescent homosexual is acceptable, but the mature homosexual is doomed.”(88) と述べている。
- 11) 少年のエディプス期が問題解決したときの、代理の父親の「死」(「父親殺し」)については、Jerry Griswold の “The Long Parricidal Dream: *Adventures of Huckleberry Finn*,” *Audacious Kids* を参照。

引用・参考文献

- Alcott, Louisa M. 1868. *Little Women*. London: Penguin, 1953.
- _____. 1869. *Good Wives*. London: Penguin, 1988.
- _____. 1871. *Little Men*. London: Penguin. 1983.
- Bell, Arthur. 1972. “The Man Without a Face.” *The New York Times Book Review*. April 9.
- Blos, Peter. 1985. *Son and Father: Before and Beyond the Oedipus Complex*. 児玉憲典訳『息子と父親——エディプス・コンプレックス論をこえて』誠信書房 1990年。
- Branch, Edgar. 1962. “Mark Twain and J.D. Salinger.” *Salinger: Critical and Personal Portrait*. N.Y.: Harper & Row.
- Corneau, Guy. 1991. trans. by Larry Shouldice *Absent Fathers, Lost Sons*. Boston: Shambhala.
- Degler, Carl N. 1983. “The Emergence of the Modern American Family.” *The American Family in Social-Historical Perspective*. 立原宏要訳「近代的な家族はいつ現れたか」『アメリカの女たち』教育社 1983年。

- Fincke, Kate. 1979-80. "The Breakdown of the Family: Fictional Case Studies in Contemporary Novels for Young People," *The Lion and the Unicorn* winter, 86-95.
- Friedan, Betty. 1981. *The Second Stage*. 下村満子訳 『セカンドステージ』 集英社 1984年。
- Galens, David M. 1993. "Isabelle Holland." *Authors and Artists for Young People* 11 N.Y.: Gale Research, 81-90.
- Goldberg, Herb. 1976. *The Hazards of Being Male: Surviving the Myth of Masculine Privilege*. N.Y.: Sanford J. Greenburger Associates. 下村満子訳『男が崩壊する』PHP研究所 1982年。
- Griswold, Jerry. 1992. *Audacious Kids*. N.Y.: Oxford. (吉田純子他訳『家なき子の物語』阿吽社 1995年)
- Griswold, Robert L. 1993. *Fatherhood in America: A History*. N.Y.: HarperCollins.
- Hawley, Richard A. 1993. *Boys Will Be Men*. Forest Dale, VT: Paul S. Eriksson.
- Holland, Isabelle. 1972. *The Man Without a Face*. N.Y.: HarperKeypoint, 1987.
- _____. 1973. "Tilting at Taboos." *The Horn Book* June, 299-303.
- _____. 1974. "The Walls of Childhood." *The Horn Book* April, 113-20.
- Johnson, Robert A. 1977. *He: Understanding Masculine Psychology*. N.Y.:Harper & Row. 1986.
- Jung, Emma. & Marie-Louise von Franz. 1986. *The Grail Legend*. Boston: Sigo Press.
- Nilsen, Alleen Pace. 1973. "Books for Young Adults." *English Journal* 62 December 12 98-1300.
- Rawlings, Marjorie K. 1938. *The Yearling*. 大久保康雄訳『子鹿物語』上中下 偕成社 1983年。
- Review of The Man Without a Face*, 1972. *Best Sellers* 32 April 15, 46.
- _____. 1972. *Booklist* 68 May 15, 816.
- _____. 1972. *Commonweal* November 17, 157.
- _____. 1972. *The Horn Book* August, 375-76.
- _____. 1972. *Library Journal* 97 July, 2489.
- _____. 1974. *Newsweek* 83 March 4, 83.
- _____. 1974. *Top of the News* 30 January, 203.
- _____. 1977. *Choice* 14 November, 1178.
- Rotundo, E. Anthony. 1993. *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era*. N.Y.: HarperCollins.
- Salinger, J.D. 1951. *The Catcher in the Rye*. N.Y.: Little Brown, 1991.
- Twain, Mark. 1884. *The Adventures of Huckleberry Finn*. N.Y.: Norton, 1977.
- _____. 1881. *The Prince and the Pauper*. N.Y.: Dell, 1985.
- 吉田純子, 1992年. 『アメリカ児童文学・家族探しの旅』阿吽社。

The Quest of “Masculinity” in *The Man Without a Face*

Junko YOSHIDA

When Isabelle Holland’s third novel for young adults, *The Man Without a Face*, was published in 1972, its controversial subject of homosexuality drew much public attention and enjoyed favorable book reviews. After almost two decades, this novel was made into a film with the same title. It is a story about a fatherless adolescent boy (Charles Nostad) who encounters a father figure (Justin McLeod) nicknamed “The Man Without a Face” because of his facial disfigurement. The plot is based on the archetypal “journey” in the “Arthurian Legend.” In this mythological story Percival who is a fatherless youth encounters the wounded Fisher King. As interpreted by Jungian psychologists, this is a quest story in which the adolescent boy seeks his male identity/masculinity through an encounter with the father figure. In *The Man Without a Face*, Justin stands proxy for Charles’s absent father and eventually helps him gain his male identity/masculinity for which Charles has been searching. In this sense, “The Man Without a Face” means two things: Justin McLeod, whose face is disfigured, and Charles’s biological father whose face he barely remembers.

The author refers to the special time/space which Justin and Charles share as a “golden cocoon.” The space functions as the psychological framework of the novel, and works as a place for communication and psychological healing: a kind of therapy room. It is, in other words, a place of intimacy between the boy and the man where each can heal their wounds. It is also a place where the author can reveal a unique image of the “nurturing father” who is also homosexual.

In the novel several episodes hint somewhat exaggeratedly at the growing phenomenon of “absent fathers” in America. Thus, by reading the novel in social and cultural context, we will have a different perspective of the specific “masculinity” portrayed in the book. The novel was published a little past the peak of the second wave feminist movement in America and the anti-Vietnam War movement. During this period not only was “manly toughness” severely condemned, but also fathers who believed in the myth of “family togetherness” were criticized. From one psychological point of view, men suffered tremendous psychic trauma because they lost a vital connection to the “Earth Mother” and

were separated from their children. In other words, fathers lost their confidence in their “masculinities,” and adolescent sons were deprived of good role models. Both Betty Friedan and Herb Goldberg maintain in their books that both femininity and masculinity went through radical change during this period. Thus, in the context of such traumatic psychic dislocation for men, the author provides a radically new image of psychological healing and male identity/masculinity through the image of the nurturing homosexual father.